

萩の原古墳群

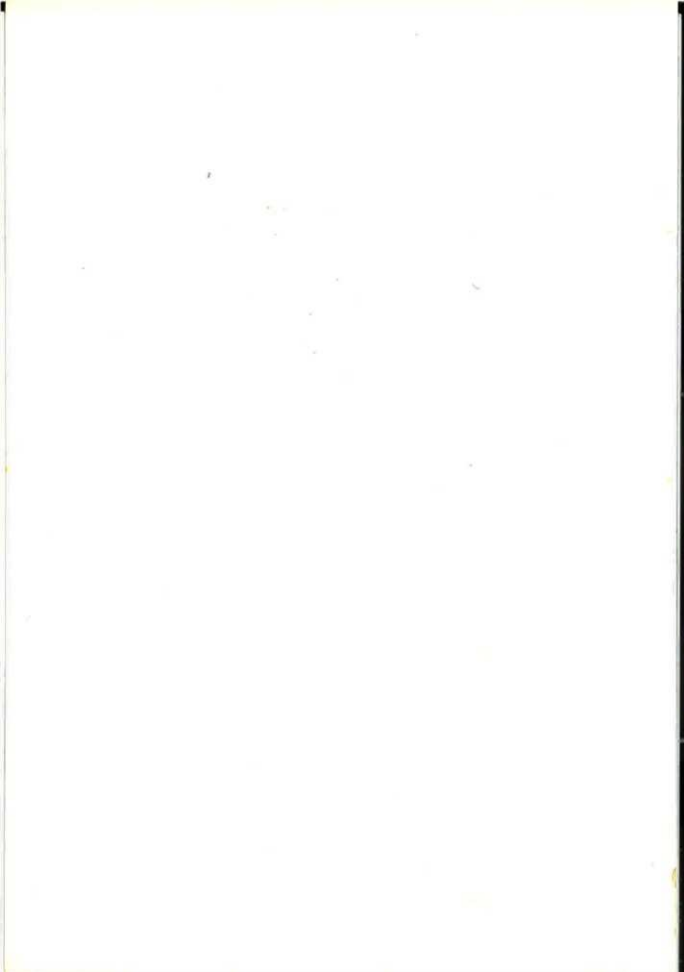
－ 福岡県糸島郡二丈町大字深江所在遺跡の調査 －

二丈町文化財発掘調査報告書

第 3 集

1990

二丈町教育委員会



萩の原古墳群

—福岡県糸島郡二丈町大字深江所在遺跡の調査—

二丈町文化財発掘調査報告書

第 3 集

1990

二 丈 町 教 育 委 員 会

序

二丈町は、「伊都国」の玄関口として、対外交渉の要所を占め、「曲り田遺跡」や国史跡「一貴山銚子塚古墳」など数多くの貴重な遺跡が存在する所であります。

近年、本町は、福岡市のベッドタウンとして宅地などの開発計画が急増し、除々に人口増加の様相を呈しております。このような状況の中、今回の調査の契機となったのは、老人福祉および医療問題の解決策のひとつとして計画された特別養護老人ホームの建設に伴うものであり、発掘調査を実施して、まとめたものが本報告書であります。

本書が、考古学研究の一助となり、文化財保護活動の資料として活用頂ければ幸甚に存じます。

なお、発掘調査に際し、暖かい御理解、御協力を頂いた二丈福祉会、白川建設株式会社関係各位に対し、深く感謝する次第であります。

平成2年3月31日

二丈町教育委員会

教育長 永 田 静 夫

例 言

1. 本書は、福岡県糸島郡二丈町人字深江字萩の原2316番の1に所在する埋蔵文化財包蔵地の埋蔵文化財調査報告である。
2. 発掘調査ならびに整理作業は、社会福祉法人二丈福祉会（代表 上原 司）からの委託を受けて、二丈町教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成元年3月1日より5月31日まで実施した。
4. 遺構実測ならびに遺構写真撮影は古川が行い、遺構全景写真は空中写真企画に委託した。
5. 出土遺物の実測ならびに製図は古川、村上敦（奈良大学）、藤井太郎（同）、小池香津江（同）、板野史（同）が行い、遺物写真撮影は古川が行った。
6. 本書の執筆ならびに編集は古川が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査の組織	1
II. 遺跡の位置と環境	4
III. 調査の記録	6
1. 萩の原6号墳	6
1) 位置と現状	6
2) 墳 丘	6
3) 周溝および葺石	7
4) 石 室	7
5) 石室の掘り方	9
6) 遺物出土状況	9
7) 出土遺物	9
2. 萩の原5号墳	15
1) 位置と現状	15
2) 石 室	15
3. 西口地区	15
IV. 結 語	17

插图目次

第1图	遗址位置图 (1/50,000)	2
第2图	周边地形图 (1/25,000)	3
第3图	镇怀石八幡宫万葉歌碑	4
第4图	填丘・版築状況実測図 (1/40)	6
第5图	周溝堆積状況図 (1/30)	7
第6图	6号填石室実測図 (1/60)	8
第7图	遺物出土状況図 (1/60)	9
第8图	出土装身具実測図 (2/3)	10
第9图	出土馬具実測図 (1/2)	10
第10图	鉄剣・鉄刀実測図 (1/4)	11
第11图	出土土器実測図 (1/3)	12
第12图	出土土器実測図 (1/3)	13
第13图	出土土器実測図 (1/3)	14
第14图	5号填石室実測図 (1/60)	16
第15图	調査区全体図 (1/200)	18

図 版 目 次

- 図版 1 萩の原古墳群（1～4号墳）全景
- 図版 2 (1) 萩の原古墳群全景（北から）
(2) 6号墳調査前
- 図版 3 (1) 6号墳調査後（真上から）
(2) 6号墳調査後（西から）
- 図版 4 (1) 6号墳全景（南から）
(2) 6号墳葺石遺存状況
- 図版 5 (1) 6号墳積石状況（北西から）
(2) 6号墳積石状況（南西から）
- 図版 6 (1) 6号墳奥壁状況（羨道部より）
(2) 6号墳玄門状況（奥壁より）
- 図版 7 (1) 6号墳閉塞石遺存状況（西から）
(2) 6号墳閉塞石遺存状況（拡大）
- 図版 8 (1) 6号墳玄門床石状態
(2) 6号墳羨道部床石状態
- 図版 9 (1) 6号墳須恵器出土状況
(2) 6号墳馬具出土状況
- 図版10 (1) 鉄剣・耳環出土状況
(2) 鉄刀出土状況
- 図版11 (1) 5号墳全景（真上から）
(2) 5号墳全景（東から）
- 図版12 (1) 5号墳近景（東から）
(2) 西口地区全景（東から）
- 図版13 (1) 6号墳川土遺物Ⅰ
- 図版14 (1) 6号墳出土遺物Ⅱ
- 図版15 (1) 6号墳出土遺物Ⅲ
- 図版16 (1) 6号墳出土遺物Ⅳ

1. はじめに

1. 調査に至る経過

近年、社会の高齢化現象によるさまざまな問題が発生する中、老人福祉および医療の問題は深刻化していると言える。福岡都市圏の人口増加に伴い、福岡市近郊および近隣市町村はベッドタウンとして着実に人口が増えており、二丈町も例外とは言えない。

こうした傾向の中で老人福祉、医療問題の改善策として養護老人の必要性が挙げられ、隣接する前原、志摩町同様二丈町内にも老人ホームの建設が求められていた。

昭和63年、社会福祉法人、二丈福祉会より特別養護老人ホームの建設計画が出され、町ならびに二丈福祉会との再三の協議の結果、二丈町大字深江の西側丘陵を建設予定地として計画が進められた。しかしながら、同丘陵には6基の横穴式石室が剥き出しとなっており、『萩の原、西口古墳群』として周知の遺跡であった。予定地にはこのうちの2基がかかっており、福岡教育事務所、二丈町教育委員会、二丈福祉会との協議の結果、1基は保存、もう1基は記録保存の形をとらざるをえない事となり、発掘調査を行うこととなった。

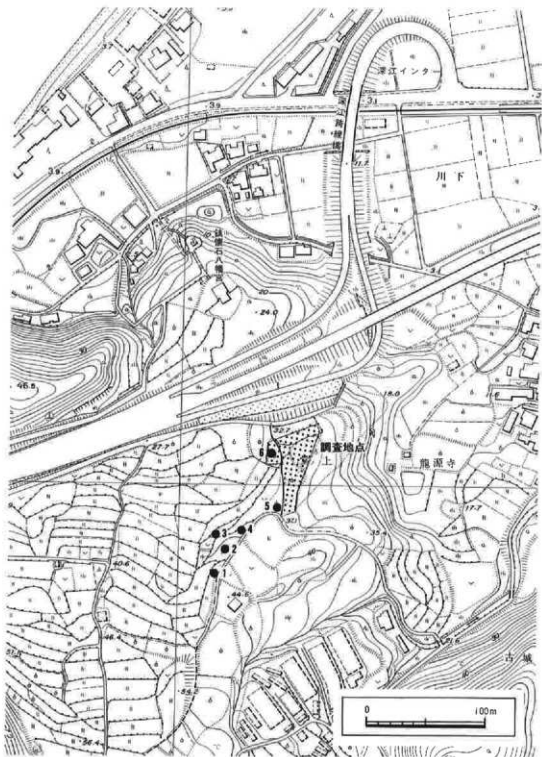
なお、調査は平成元年3月1日より5月31日までであり、調査終了後整理作業を行い、今回の報告となった次第である。また、発掘調査に御理解をいただき、御援助くださった二丈福祉会、白川建設株式会社、関係各位には心からお礼を申し上げる次第であります。

2. 発掘調査の組織

調査主体	二丈町教育委員会
総 括	教 育 長 永 田 静 夫 教 育 課 長 鬼 島 利 隆
庶 務	同和教育係長 宮 崎 昌 之 社会教育係長 松 崎 栄 三
調 査	同 主 事 古 川 秀 幸

調査、整理作業 村上芳登、永田篤志、重 徳子、中國アヤ子、中國初子、中國和了、中國ミチ子、木下文子、山田稚枝

なお、調査時においては、福岡県教育事務所 橋口達也、小池史哲、前原町教育委員会 川村博、岡部裕俊、各氏に有益な御助言をいただき、整理作業時には前原町教育委員会ならびに復元室関係者に多大なる御援助をいただいた。



第2図 周辺地形図 (1/25,000)

Ⅱ．遺跡の位置と環境

萩の原古墳群は直下に深江の浜、玄海灘を見下ろす事のできる脊振山系の二丈所（標高711.4m）より派生する丘陵に位置する。同丘陵上には昭和54年にも初期須恵器を搬出する古墳（堅穴系横口式石室）が県文化課により調査され、他にも古式の古墳が存在する可能性を秘めている。また、丘陵先端部は「子負ヶ原」と呼ばれ、九州最古と言われる万葉歌碑（第3図）を持つ鎮懐石八幡宮が鎮座し、人々の信仰を集めている。同八幡宮の名称は『神宮皇后が産期を迎えて新羅遠征を行った折、帰還するまで出産の延期を祈願して卵形の美しい石を2個、腹帯に納め出発した。そして帰国後無事に応神天皇を出産する事ができたの



第3図 鎮懐石八幡宮万葉歌碑

で皇后自ら、その石を子負ヶ原の地に奉納のした。』という伝説からきており、万葉歌碑に刻まれている歌もこの伝説に感動した山上憶良が読んだものである。石碑自体は安政6年（1859年）中津藩の儒学者日蓮武澄が書いたもので万葉集813、814番の歌を題詞とも万葉歌名で刻んでいる。

萩の原古墳群がある深江地区はその名の通り、内陸部が入り江となっており、海岸線はかなり入っていたようである。そのため遺跡も山裾に集中しているが、竪柱型石製品が出土した塚田遺跡（古墳群）は砂丘上に造築されると言う特異な立地を呈しており、また、弥生の集落もかなり広範囲で確認されている。稲作開始の遺跡として著名な「石崎曲り田遺跡」はこの汀線が入っている一貴山地区の独立丘陵上に位置し、周辺には前期の大規模な集落も存在するようである。また、同丘陵からは、昭和25年にも製管玉120個、硬玉製勾玉、銅剣などを副葬した中期の甕棺が発見されており、当時より注目をあびていた場所と言えよう。古墳時代に入ってから二丈町の3基の前方後円墳はその主軸を入り江に向けるよう造られており、中でも国史跡一貴山桃子塚古墳

は船鏡を含む10面もの鏡を持っており、仿製鏡の中には同范鏡2面をそろえたものが3種類入っており、大和政権の進出を裏付けるものと言え、また、伊都国の時代以後も西の玄関口としての交通の要衝であったと言える。こうした事は奈良時代『延喜式』(巻28)に「深江駅」「佐財駅」の名称が見受けられる事でも言え、奈良時代に太宰府までの官道が通っていた事は確実であろう。現在の所、「佐財駅」についてはオノ原という地名が残っており、昭和53年の調査でまとまった数の堀建柱の建物群が確認されている事などから何らかの関係があるものと考えられている。いずれ、深江地区においても同様な遺構が調査されるであろうが、弥生時代以降、大陸文化摂取の玄関口として後世までかなり特異な性格を持っていた地区と言える。

参考文献

- 註1 橋口・中間編『鎮懐石八幡裏古墳』「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」第7集
- 註2 万葉集
- 註3 二丈町誌編集委員会 『二丈町誌』
- 註4 橋口・中間編『塚田遺跡』「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」第7集
- 註5 橋口・中間編『曲り田遺跡』1 「同 上」第8集
- 註6 原田大六 『実在した神話』
- 註7 小林行雄、有光教一、森貞次郎編『一貴山饒子塚古墳の調査報告書』(福岡県教育委員会「福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書」第16集 史蹟之部)
- 註8 佐々木隆彦編『竹戸遺跡』二丈町文化財調査報告書 第1集

Ⅲ. 調査の記録

1. 萩の原6号墳

1) 位置と現状

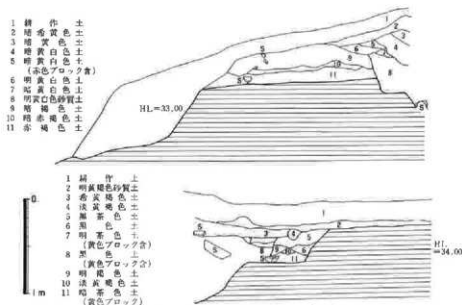
北東へ伸びる丘陵の西側斜面に立地し、古墳群中最も端にある。現状は蜜柑畑で、以前水田として使っていた所でもあり、西側斜面は段丘状にカット、北側も急激に落ちている。また、東側は農道、側溝によりかなりの削平を受けていた。調査前、すでに4枚の天井石が露出していたが、石室の遺存状況は期待できた。しかし、東側の1枚がずれており、明らかに盗掘を受けた形跡があった。また、天井石にはくさびの痕跡があり、開壟時、石を割ろうとしたと思われる。

2) 墳丘

南北に2本のトレンチを設け、墳丘の確認を行った。その結果、南側(A-Tr)は現在の蜜柑畑で、削平がひどく、葦石の一部を確認しただけで、墳丘は残っていないかった。また、北側(B-Tr)では若干墳丘が残っていたが、急斜面にカットされ葦石は確認できなかった。

A-Tr 表土の次が旧水田の床土となり、すぐ下は地山面となった。掘り方内は石室構築時の裏込めで、強く叩きしめられていたが、裏込め石は使用されていなかった。

B-Tr 掘り方は盛り土により整地した後、掘りこまれている。裏込め、天井石の被覆土の層位も顕著に確認でき、また、掘り方内には石室躯体を固定させるため、人頭大の石を裏込めとして使用していた。

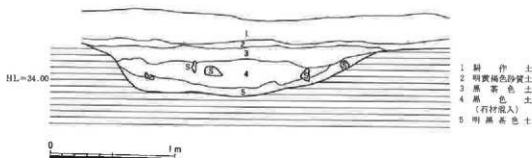


第4図 墳丘・版築状況実測図 (1/40)

3) 周溝および葦石

南側のみで確認した。周溝は幅200cm～300cmと広く、深さは水田床土面から40cmと削平のため、かなり浅い。また、東側へいくほど狭まっており、馬蹄形状となる可能性が高い。

葦石は3mの長さで、1段目だけが残っていた。



第5図 周溝堆積状況図 (1/30)

4) 石室

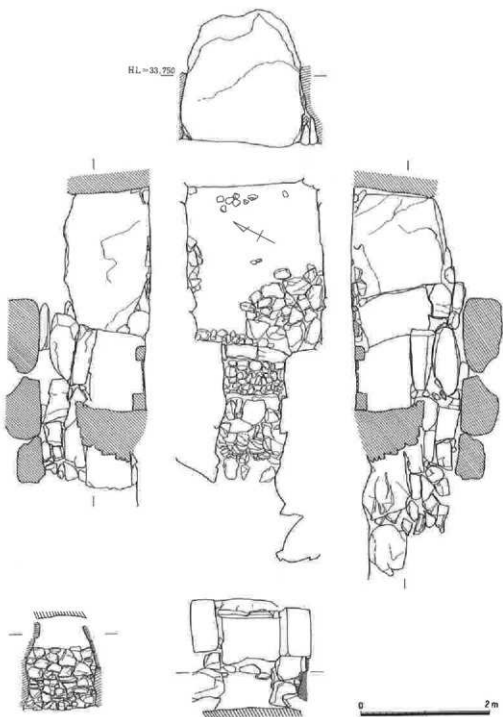
石室は単室兩袖式で、主軸はN-62°-Eをとり、南北に開口している。玄室は長方形で羨道部は入り口側が若干北へぶれているがほぼ直線に付いている。石材は全て花崗岩である。

石室計測値

長さ	(玄室)		幅	(玄室)	
	右側壁	2.49m		奥壁	2.02m
	左側壁	2.38m		玄門	1.00m
	(羨道部)			(羨道部)	
	右側	3.25m		右袖部	0.57m
	左側	2.20m		左袖部	0.45m

腰石は奥壁1個、右側壁2個、左側壁1個と大石を横位に使用し、袖部は大石の上に中位の石を2個積み重ねる事により側壁と高さをそろえている。羨道部は左側(北斜面側)が一部抜き取られており、西側斜面を段丘状にカットして水田とした折、破壊されたのであろう。

扉石は2箇所据えられている。ひとつは玄室と羨道部を仕切るように玄門に、また、もうひとつは玄門から85cm入り込んで閉鎖石と接したところに伴に20×90×20cm位の石であった。敷石は玄室床面の西南部と羨道部にびっしりと敷かれており、10cm～40cm位の川原石状のものや板石状のものが使用されていた。天井石は4個の巨石を用いていたが、奥壁側の1枚が北側にずれており、石室内におちかかっていた。また、石の表面にはぐさびの痕跡が残っており、後世の開墾時



第6図 6号墳石室実測図 (1/80)

に石を破碎しようとしたもののずらすのみにとどまったのだらうと考えられる。閉塞石はほぼ完全に残っていた。閉塞状況は内側から正方形の一枚石を据え、外側からは二の腕大の石を天井から50cm位の高さまであけて積み上げていた。また、閉塞石の下方は乱れており、追葬時、積みなおしをしたと思われる。

5) 石室の掘り方

長槽円形の掘り方で丘陵の傾斜にあわせて、南側は二段に掘り込まれ、北側は急斜面に掘り込み、石で裏込めしていた。

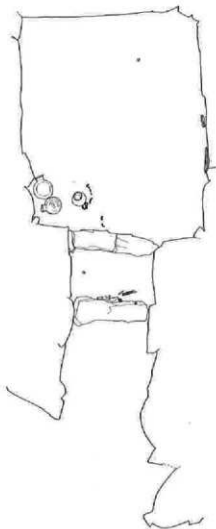
6) 遺物出土状況(第7図)

本占墳は、玄室前半部以外、床面が残っており、北西隅に須恵器(甕、提瓶)、馬具が一括して供献されているのが検出された。他に右側壁中央より鉄刀が、羨道部榫石付近から鉄剣がそれぞれ破碎した状態で出土、耳環4個も原位置をとどめていない。鉄剣の出土状況を見ると追葬の際、入り口から副葬品をかき出したものと考えられる。また、石室内掘乱土中より土師器(甕、壺)、石室外では天井石覆土より須恵器大甕、南東地山面よりガラス小玉、閉塞石前より杯蓋などが出土した。歴史時代のものでは玄室奥壁側より糸切り底の土師皿が数点出土しており、この時期盗掘を受けたものと考えられる。

7) 出土遺物

装身具(第8図)

耳環(1~4) 1は玄門の榫石上より出土した銀環であり、長径33cm、短径3.1cmを計る。2は玄室(奥壁側)埋土より出土した銀環で1と対であろう。長径3.3cm、短径3.0cmを計り、若干腐蝕している。3は玄門、榫石上より出土した金環である。長径2.9cm、短径2.7cmを計る。腐蝕が著しく、青錆が付着している。4は玄室(左側壁側)埋土出土の金環であり、腐蝕がはげしく、一部に金メッキが残るだけである。長径2.95cm、短径2.6cmを計る。3と対であろう。

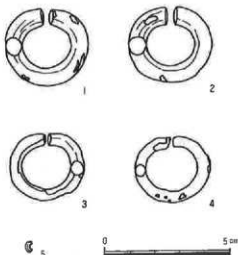


第7図 遺物出土状況図 (1/60)

ガラス小玉(5) 5は墳丘地山面より出上したガラス小玉で半分から欠損している。径は0.5cmを計り、色調はグリーンである。

馬具類 (第9図)

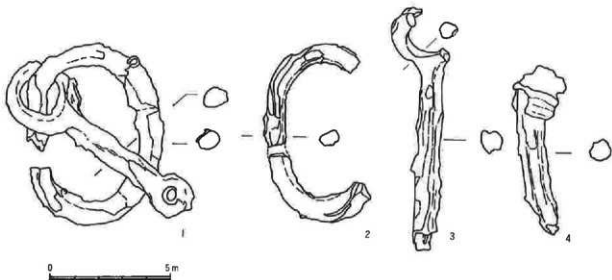
轡部 1は鏡板で銜金具を装着している。鏡板は円環であり、長径7.5cm、短径5.7cmを計る。銜金具は全長9.2cmを計る。2は鏡板で半分近くを欠損するが、1とはほぼ同サイズであろう。3は引手である。全長10cmを計り、連結部分は欠損していた。4は用途不明であるが、連結部分が残っており、轡部の一部と言える。全長で7cmを計る。



第8図 出土装身具実測図 (2/3)

鉄器 (第10図)

1は鉄刀で右側壁と敷石の間にはさまって、破砕した状態で出土した。現存している長さは55cmであるが、本来60cm位あったと思われる。2は閉鎖形石鐙の鐙石付近より出土した鉄剣であり、破砕がひどく、全長は不明である。剣身の一部に木質部分が残っている。



第9図 出土馬具実測図 (1/2)

出土土器

須恵器（第11図～第13図）

杯 蓋（1, 2）

1は閉塞石前面および耕作土中より出土した坏であり、口径11.6cm、器高3.7cmを計る。内傾する立ち上がりをつくり、底外面へラ削り、その上を一定方向にナデ消している。焼成は良好で、暗灰色を呈す。2は蓋で、口径13.4cm、器高4.9cmを計る。天井部から丸く口縁に至り、口縁部はやや外反する。天井部外面にはへラ削りを施している。焼成は良好、灰色を呈する。

壺（3）

3は玄室右袖付近出土の壺で、口径13.5cm、器高13.4cmを計る。焼成は極めて良く、暗灰色を呈する。口縁は横撫で丸く仕上げ、頸部以下、カキ目、内面底にあて具痕が残る。また、頸部にはへら記号が施されている。

提 瓶（4, 5, 6）

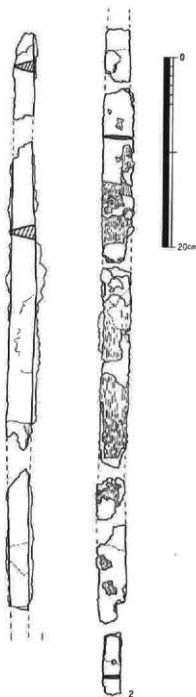
4, 5は右袖付近、6は玄室埋土より出土した提瓶である。4は口径85cm、器高21.8cmを計り、焼成は良好、暗灰色を呈する。全体にカキ目を施し、胴下半はへラケズリを行う。また、へラケズリとの境はへら工具による斜行線文が施入されている。5は口径10.7cm、器高25.8cmを計る。焼成は良く、灰白色を呈す。器壁表面には自然釉をかぶり、砂粒も無数に付着している。また、胴部付近には別個体の土器が施き付いており、焼成時に窯内で寄せて据えすぎたものであろう。6は口縁の大半を欠くが、胴部はほぼ完全に復元できた。現存高は21.8cmを計り、焼成も良く、暗灰色を呈する。全体にカキ目を施し、内面に青海波のあて具痕が残る。

高 杯（7）

奥壁側埋土出土で、脚部半分のみである。全様は不明だが長脚に2段のスカシが入っている。

大 甕（8, 9）

天井石上、右室内埋土、閉塞石前耕作土、周溝内と出土



第10図 鉄剣・鉄刀実測図 (1/4)

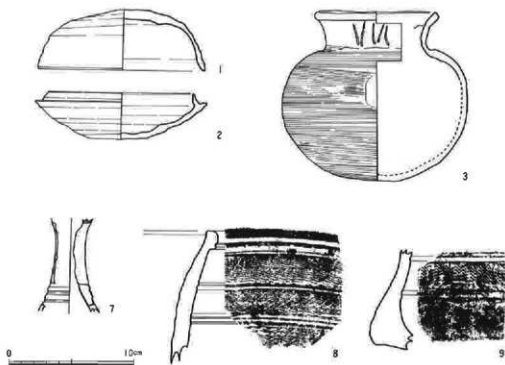
地点がばらばらで全様ははっきりとしない。8は甕の口縁であり、青灰色を呈する。口縁部は厚く、口縁端部下方に凹線を施す。また、口頸部も口縁下と上部に一条、中央に二条の凹線を施し、間には波状文を施している。9は頸部の一部のみであるが、焼成、色調、波状文などの違いにより8とは別個体であろう。色調は暗灰色で焼成は堅緻である。肩部はよくしまっており、上方に開く大甕であろう。凹線の間にしっかりした波状文が入る。

土師器 (第13図)

10は口径18.5cm、器高14.9cmを測る甕で、内面ヘラ削り、外面タテハケを施す。淡褐色を呈し、焼成はややもろい。11は口径10.9cm、器高8.9cmを測る直口壇で、丸底に外傾して立ち上がる口縁を有する。淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。

土師皿 (第13図)

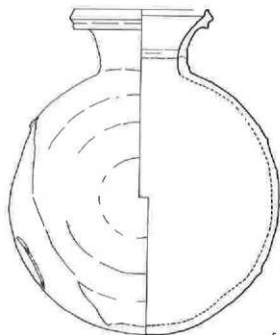
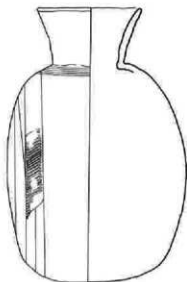
12は口径8.8cm、器高1.3cm、底径7.6cmを測り、糸切り底である。13は半分欠損しているが、復元口径7.0cm、器高1.7cm、底径5.4cmを測る。伴に黄白色を呈し、白色砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。



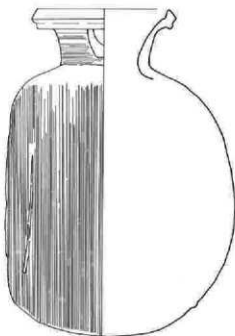
第11図 出土土器実測図 (1/3)



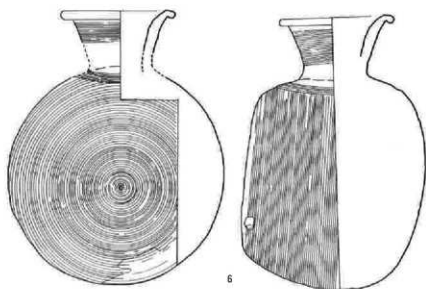
4



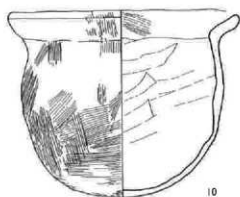
5



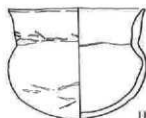
第12圖 出土土器実測圖 (1/3)



6



10



11



12



13



第13圖 出土土器実測圖 (1/3)

2. 萩の原5号墳

1) 位置と現状

古墳群中唯一主軸が違い、南東に開口している。したがって、丘陵の西側斜面が入り口とならず、平坦部に古墳を構築している。墳丘は西側および、北側で若干残っているが、東側は農道のため削平されていた。現在、玄室内の奥壁には石碑が建てられており、地域住民の信仰を集めているが、この事がかえって古墳を破壊から防いだと言えよう。

5号墳は古墳群中最大規模の石室を持ち、極めて残りがよいため計画段階より建設予定地からはずしてもらい、現状保存の形をとった。そのため、今回は石室の測量調査のみを行い、発掘調査は行わなかった。

2) 石室

単室両袖式であり、長方形の玄室に末広がり気味の羨道部が付く。主軸はW-18°-Nをとり、南東に開口している。石材は全て花崗岩である。

石室計測値

長 さ	(玄 室)		幅	(玄 室)	
	右側壁	2.38m		奥 壁	2.03m
	左側壁	2.29m		玄 門	1.09m
	(羨道部)			(羨道部)	1.53m
	右 側	2.75m		右袖部	0.76m
	左 側	5.32m		左袖部	0.22m

腰石は奥壁に1.92×1.83mほどの大石を据え、左側壁は横位に大石を据え、一回り小さい大石を積んで奥壁と高さを合わせている。右側壁は大石の上に4分の1ほどの石を5個積み上げ高さを合わせている。敷石や閉塞石は完全になく、奥壁側に石碑が祭られていた。

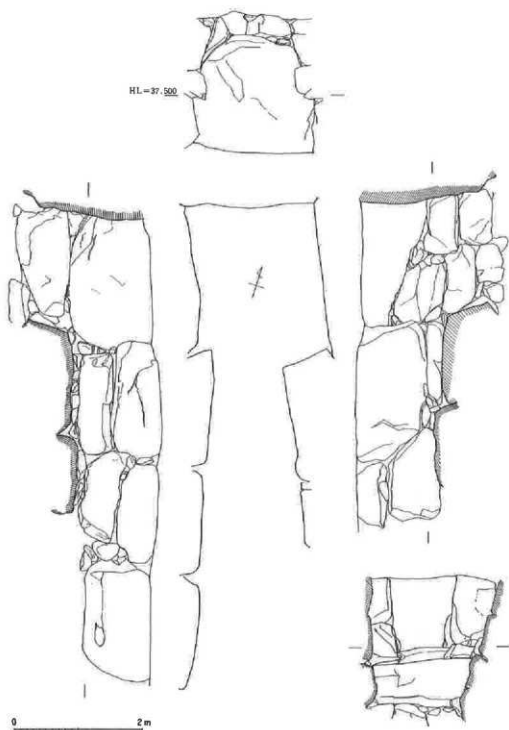
3. 西口地区

1) I 区

5号墳の東側で周溝確認のため調査を行った。結果的には現地表より70cmほど下がり、後世の削平により、溝は確認できなかった。しかし、ビットが確認され、少量ではあるが須恵器片、土師皿片の出土をみ、東側斜面(谷部)に包含層を形成していた。また、包含層自体も薄く、出土器も細片でパンケース1箱分である。

2) II 区

4箇所で、表土下より花崗岩が表れていたため、トレンチを設定して、古墳かいな確認を行った。結果的には全て単独のもので、石組はおろか、土器の出土もみなかった。しかし、自然



第14图 5号墳石室実測図 (1/60)

石とは考えにくく、開壟時、付近の古墳を破壊して移動させた可能性がある。

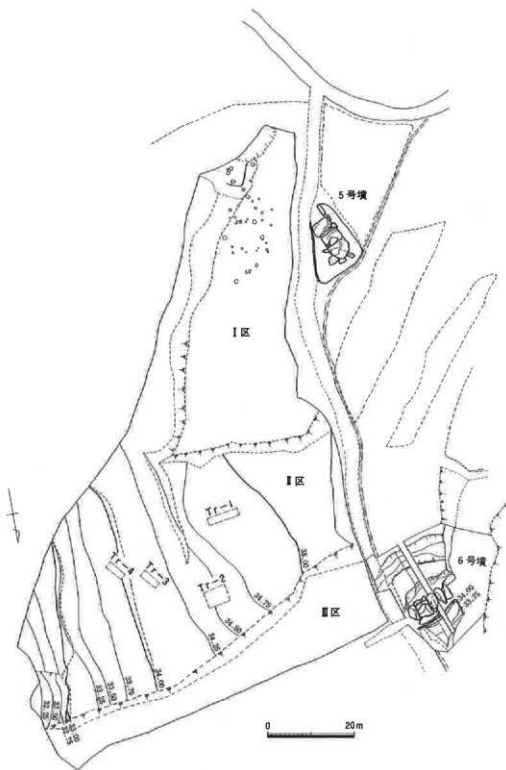
3) III 区

北東隅の石垣の一部に面を取った花崗岩が使用されていたため、調査を行った。しかし、表土以下すぐ地山面となり、なんら遺構は確認されず、若干、中・近世の土器の出土をみた。II区同様、古墳を破壊したものであろうが、その後石材を石垣に転用したと考えられる。同様のケースは発掘調査区以外の丘陵斜面にも多く見られ、相当の数の古墳を後世の開壟で破壊したと考えられる。

IV. 結 語

最後に今回調査を実施した古墳についてまとめておきたい。6号墳の石室形態は前述の通りであり、横穴式石室の最終末段階とは言えない。また、出土土器から見ても6世紀後半という築造年代が与えられるであろう。次に石室の再利用であるが、遺物の出土状況や閉塞石の積みなおしの状態から見ても最低2回の追葬が行われているが、その時期も時間差はあまりないものと考えられる。石室床面出土の土師皿は当然この時期に盗掘に入ったためであり、閉塞石の遺存状況からも天井石の隙間より進入している。この天井石の隙も周囲の開壟によるものと言え、同地が開かれたのもこの時期と言えよう。また、図化していないが、近世腕や寛永通宝も古墳周辺や天井石覆土より出土しており、この地に大幅な手が加えられたのが江戸期に入ってからだと言えるだろう。

次に5号墳であるが、発掘は行ってなく、出土遺物もないため確実な年代を与える事はできないが、選地的には6号墳より高位に立地している事から若干6号墳より先行する可能性がある。しかし、石室の規模自体はそれほど変わらず、5号墳の土軸、開口方向が古墳群中唯一違っている事などから見て築造年代もさほど大差ないものと言えよう。



第15图 调查区全体图 (1/200)

圖 版



萩の原古墳群（1～4号墳）全景



(1) 萩の原古墳群全景(北から)



(2) 6号墳調査前



(1) 6号墳調査後(真上から)



(2) 6号墳調査後(西から)



(1) 6号墳全景(南から)



(2) 6号墳石造遺存状況



(1) 8号墳積石状況(北西から)



(2) 8号墳積石状況(南西から)



(1) 6号墳奥壁状況(羨道部より)



(2) 8号墳玄門状況(奥壁より)



(1) Ⅱ号墳閉塞石遺存状況(西から)



(2) Ⅱ号墳閉塞石遺存状況(拡大)



(1) 6号墳玄門床石状態



(2) 6号墳羨道部床石状態



(1) 6号墳須恵器出土状況



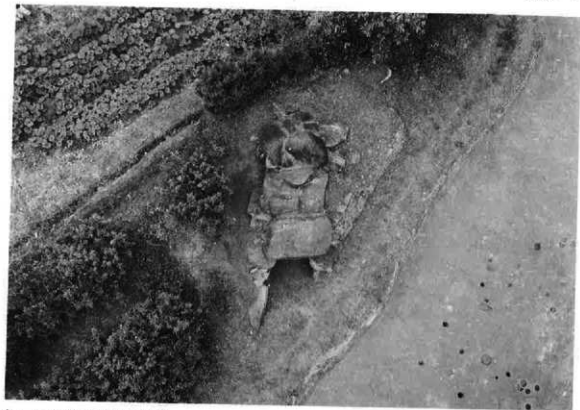
(2) 6号墳馬具出土状況



(1) 铁剑・耳環出土状況



(2) 铁刀出土状況



(1) 5号墳全景(真上から)



(2) 5号墳全景(東から)



(1) 5号墳近景(東から)



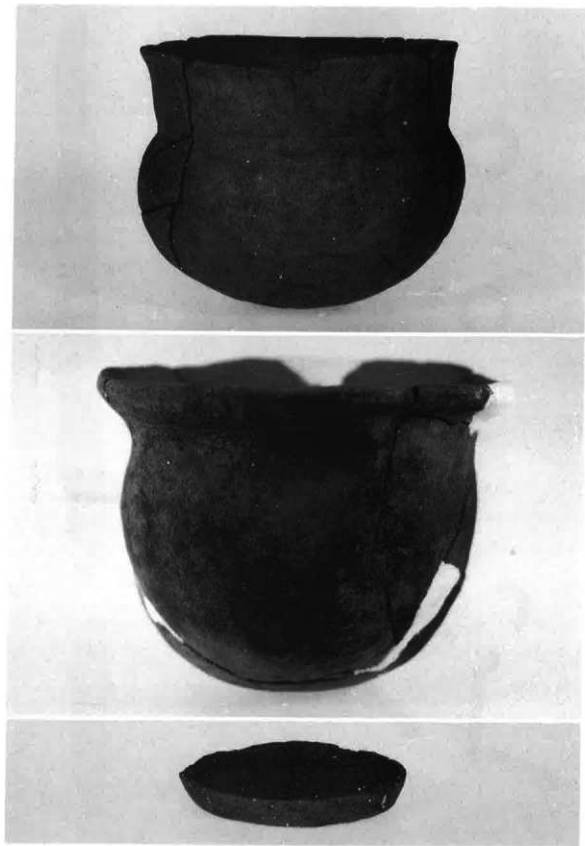
(2) 西口地区全景(東から)



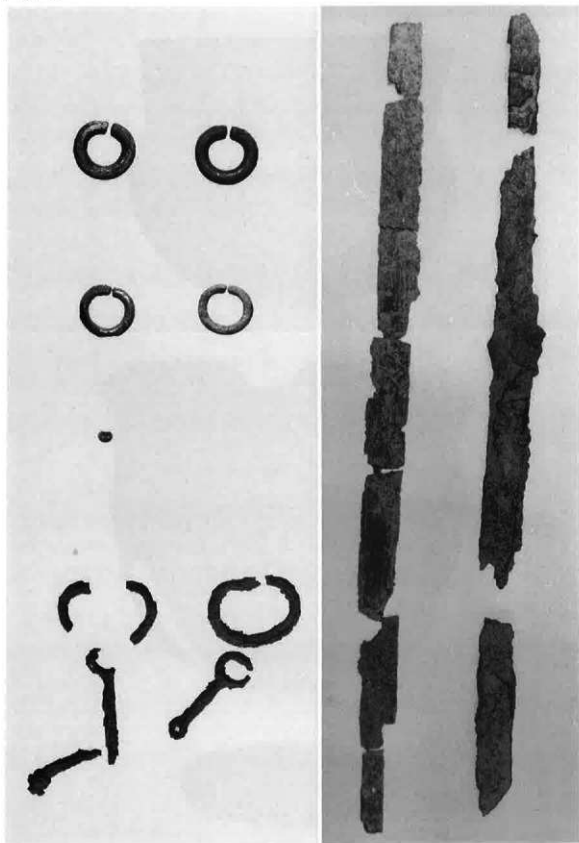
(1) 6号填出土遺物 I



(1) 6号墳出土遺物Ⅱ



(1) 6号墳出土遺物Ⅲ



(1) 6号墳出土遺物Ⅳ

萩の原古墳群

二丈町文化財発掘調査報告書

第 3 集

平成 2 年 3 月 31 日

発 行 二 丈 町 教 育 委 員 会
福岡県糸島郡二丈町大字深江 1071

印 刷 ア オ ヤ キ 株 式 会 社
福岡市中央区渡辺通 2 丁目 9-31



